保育園の室内環境

大槻 千秋

社会福祉法人ユーカリ福祉会中野みなみ保育園 園長
〒164-0014 中野区南台5-29-9

Indoor environment of a nursery school.

Chiaki OTSUKI

Nakano-Minami nursery school
5-29-9, Minamidai, Nakanoku, Tokyo, JAPAN 164-0014

要 旨

日本の保育園は幼稚園と並んで就学前の子どもの保育をしているが、幼稚園また他の国の幼児教育施設と比べて保育時間が長いのが特徴である。月齢の小さい子どもたちが長時間過ごす場所なので、保育園の室内環境は非常に重要である。国や自治体の定めた環境に関する規定をはじめ、筆者の保育園で心がけている環境設定について紹介する。

Abstract

It is a feature that the child care time is long compared with the infantile education facilities in the kindergarten and other countries though the day nursery in Japan takes care of a preschool child as well as the kindergarten. Because it is a place where children with a small months old spend a long time, the indoor environment of the day nursery is very important. It introduces the environmental setting borne in mind in author's day nursery including regulations concerning the environment that the country and the municipality provided.

Key words: 保育園(nursery school), 国基準(standard), 室内環境(Indoor environment), 安全性(safety)

1. 緒言

会員の方々は日本の保育園の事情をあまりご存知ないものとして、この文章を書かせていただく。よく知っておられる方にはくどいと思われるかもしれませんがご容赦いただきたい。

日本の保育園は世界の幼児施設の中でも独特である。就学前の乳幼児を預かって一定時間保育する施設はどここの国にもあるが、幼稚園と保育園の区別はない。わが国では幼稚園は文部科学省の、保育園は厚生労働省の管轄であり、両者を一本化しようとする動きは以前からあるがなかなか実現しない。また日本ほど保育時間の長い国はあまりないようである。「超」長時間、幼い子どもが家庭を離れて友だちや保育士と過ごす場所として、保育園は物理的にも人的にも良い環境を整えようとして努力している。しかし、国や自治体の保育園にかかる予算は年々削ら

れるばかりであり、どここの保育園も不十分な補助金でやりくりしに苦労している。

2. 認可保育園とは

正式名称は「保育所」であるが、一般には「保育園」と呼ばれることが多いので、ここでは保育園と書かせていただく。保育園には、認可保育園とそれ以外の認証保育園や無認可保育園等の種類がある¹⁾。さらに認可保育園には、自治体直営の公立保育園と、社会福祉法人や株式会社などが設置し運営する民設民営園(私立認可保育園)、自治体が設置し民間が運営する公設民営園等がある。筆者の勤務する中野みなみ保育園は私立認可保育園である。私立と言っても、認可保育園は自治体の管理下におかれ、入所児童は中野区役所の保育園入園相談係が選考委員会を開いて決定する。保育園が決めることはできない。保護者が納める保育料は区が徴収し、補助金と呼ばれる保育園の運営費は国が2分の1、都と区が4分の1

受付：2008年3月31日 (Received : 31 March 2008)

ずつ負担して区を通して支給される。中野区の場合、一時話題になった保育料の滞納はほとんど無いが、運営費の中に占める保護者負担の保育料の割合は15%ほどにすぎない。残りは全て税金でまかなわれている²⁾。

3. 環境について認可保育園が満たすべき国基準

保育園が認可されるためには、国や都や区の決めた基準を満たすことが必要である。中野区の場合、子どもを保育する部屋の面積は、0歳児なら一人5.5平方メートルなどと決められている。さらに、子どもを保育する保育士の人数にも基準がある。中野みなみ保育園の園児の定員と担任保育士の人数、保育室の面積は次の表1の通りである。なおここでは産

休明けの生後57日目の乳児から受け入れている。

4. 保育園の一日の流れ

季節によってまた日によって違いはあるが、園児たちは朝登園してから夕方(夜)降園するまでの間、次のようなタイム・スケジュールで生活している。園児によって登園時刻と降園時刻は違う。18:15を過ぎると延長保育となり、別途保育料がかかる。最も保育時間の長い子は13時間保育園で過ごすことになる。筆者の園では毎年3、4名の子を毎日ではないが13時間保育している。

5. 室内環境

月齢(年齢)によって、保育室内の環境設定(家具

表1 認可保育園の条件(中野区の例)³⁾

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
子ども一人当たりに必要な広さ	5.5㎡	3.3㎡	1.98㎡	1.98㎡	1.98㎡	1.98㎡
保育士一人当たりの園児数	3人	5人	6人	20人	30人	30人
中野みなみ保育園の定員	9人	14人	18人	18人	18人	18人
同担任保育士数	4人	4人	4人	2人	2人	1人
同保育室の広さ(約)	54㎡	56㎡	52㎡	34㎡	34㎡	38㎡

注：3才以上児の保育室には遊戯室(80㎡)も加える。

表2 保育園の大凡の一日のスケジュール

	0歳児組	1歳児組	2歳児組	3歳児組	4歳児組	5歳児組
7:15	登園開始 自由遊び	登園開始 自由遊び	登園開始 自由遊び	登園開始 自由遊び	登園開始 自由遊び	登園開始 自由遊び
9:15	おやつ	おやつ	おやつ			
9:30	散歩	散歩	散歩	朝の会	朝の会	朝の会
10:00				設定保育, 散歩等	設定保育, 散歩等	設定保育, 散歩等
10:30	離乳食または					
11:00	昼食	昼食				
11:15			昼食			
11:30	午睡			昼食		当番活動
11:45		午睡			昼食	
12:00			午睡			昼食
12:30				午睡		
13:00					午睡	
13:30						午睡
14:30	起床・離乳食	起床	起床	起床	起床	起床
15:00	またはおやつ	おやつ	おやつ	おやつ	おやつ	当番活動
15:30	自由遊び	自由遊び	自由遊び	自由遊び (園庭等)	自由遊び (園庭等)	おやつ 自由遊び (園庭等)
16:00	降園開始	降園開始	降園開始	降園開始	降園開始	降園開始
18:15	補食・夕食	補食・夕食	補食・夕食	補食・夕食	補食・夕食	補食・夕食
20:15	最終降園	最終降園	最終降園	最終降園	最終降園	最終降園

の配置やおもちゃの置き方など)は異なる。0歳児室はゆったり這い這いができるように広い空間をとったり、1歳児室は走り回らないように遊具や家具で部屋を仕切ったり、4歳児室はままごとや絵本のコーナーを設けたりというように。子どもたちが、楽しくゆったり遊べるように、どのクラスも工夫を凝らす。

子どもの遊びの環境を整えるだけでなく、保育者の動線も考えなくてはならない。たとえばおむつ交換台のそばに新しいおむつの入った棚を置いたり、配膳用ワゴンのそばにテーブルを置いたりするなど、保育者たちが連携をとりながらスムーズに動けるように工夫している。この「物の配置」がうまくいかないと、1箇所に子どもがあふれて動きが取れなくなり、泣いたり友だちをたたいたりトラブルの元になる。

部屋の広さは変えられないが、レイアウトは変えられる。その年にそのクラスを受け持った担任の保育のしかたや好みによって、担任が変わると保育室も毎年模様替えされている。

しかしこうした物理的な環境より、子どもにとってもっと大切なのは人的環境である。子どもたちは長時間友だちとそして保育者とともに過ごす。月齢が小さいほど、特定の保育者との安定した愛着関係が必要である。月齢が高くなるにつれ、幼い子どもであっても、子ども同士でしっかり社会を形成していく。それを指導し、まとめていくのが保育者である。一つの集団(クラス)を複数の保育者が保育していくので、保育者同士が良いコミュニケーションを取っていかないとうまくいかない。担任が1人しかない5歳児クラスは別として、複数の担任がいるクラスでは、担任同士が共通の保育観を持ち、仲良く協力し合って保育できるクラスとそうでないクラスとでは、子どもたちの育ち(発達)に差が出るほどである。筆者は園長として、「良い保育者集団」を作れる保育者の組み合わせを考えて、クラス担任を配置しているのだが、見込み通りに行かず失敗することもある。

6. 安全な環境

どんなに良い保育をしていても、事故を起こしては何もならない。保育室の安全は、目に見える物の配置に気をつけることと同時に、目に見えない病原菌などにも気を配らなくてはならない。這い這いする子どもの手の届くところに口に入ると危険な小

さいおもちゃをおかないとか、つかまり立ちする子が立ったときに頭をぶつけないように家具の配置を工夫するとか、つまずいて転ばないようにじゅうたんの端をしっかりと固定するとか、木の床で滑らないように滑り止めのニスを塗るとか、「当たり前」のことではあるが、出来る限り「潜在危険」を防ぐよう努力している。

小さい子どもたちが大勢長時間一緒に過ごすので、一人が病気になると他の子どもに簡単にうつる。伝染性の強い下痢や嘔吐の風邪にかかった子はできるだけ休んでほしいのだが、仕事を休めない保護者ばかりなので、無理をしても登園してくる。保育室で吐いてしまうと大変である。特に毒性の強いノロ・ウイルスの場合はアルコールが効かないので、ピューラックス液を噴霧し、付近の空気を吸い込まないように注意しながら始末しなくてはならない。インフルエンザもあつという間に蔓延してしまうので、流行期になると部屋の換気に気を配り、加湿器をフル稼働させ、子どもたちにはうがいさせる。

7. おわりに

保育園は幼い子どもにとって「家庭」と同じである。親が子どものために環境を整えるのと同じように、保育者も子どものために環境を整える。

これはここに書くべきことではないかもしれないが、企業の方も読んで下さると思うので、一つ訴えたい。それは幼い子どもを抱えた若いパパとママを、早くお家に帰して上げて下さいということである。4時や5時には帰りにくい、子どもが病気でも休みにくい、育児休暇をとりにくい、という職場「環境」では、少子化問題は到底解決しない。子どものために休んでも、すぐに元の職場に元の通り復帰できるようにしていただければ、女性たちは元気を出して子どもを産んでくれるのではないか。「仕事の替わりはいても、お母さんの替わりはいない。その子のママは世界にたったひとりだけ」なのだから。

引用文献

- 1) 保育所設置認可等事務取扱要綱 平成10年 東京都福祉保健局
- 2) とうきょう福祉ナビゲーション
<http://www.fukunavi.or.jp/fukunavi/index.html>
- 3) 中野区ホームページ
<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp>